

実践報告

体育祭・修学旅行で成長する高校生達とともに

森 均*

With High School Students who grow up through
Sports Festivals and School Trips

Hitoshi MORI

【要 約】

高等学校学習指導要領（平成30年告示）に示されている特別活動の目標を確認し、筆者が校長を務めていた大阪府立高等学校（全日制の課程 普通科 1学年7学級）において、体育祭、修学旅行の際に生徒達と交わした会話をもとに生徒達が成長する姿をリアルに紹介している。

教職をめざしている方、迷っている方に是非読んでいただきたい。

*大阪女学院大・短大教員養成センター

I 目的

高等学校学習指導要領（平成30年告示）の第5章において、特別活動の目標は次のように示されている。

〔第1 目標〕（特別活動の目標）

集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせ、様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決することを通して、次のとおり資質・能力を育成することを目指す。

- (1) 多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動を行う上で必要となることについて理解し、行動の仕方を身に付けるようにする。
- (2) 集団や自己の生活、人間関係の課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりすることができるようにする。
- (3) 自主的、実践的な集団活動を通して身に付けたことを生かして、主体的に集団や社会に参画し、生活及び人間関係をよりよく形成するとともに、人間としての在り方生き方についての自覚を深め、自己実現を図ろうとする態度を養う。

また、「第2 各活動・学校行事の目標及び内容」の中で、学校行事については目標と内容が次のように示されている。

〔学校行事〕

1 目標

全校若しくは学年又はそれらに準ずる集団で協力し、よりよい学校生活を築くための体験的な活動を通して、集団への所属感や連帯感を深め、公共の精神を養いながら、第1の目標に掲げる資質・能力を育成することを目指す。

2 内容

1の資質・能力を育成するため、全校若しくは学年又はそれらに準ずる集団を単位として、次の各行事において、学校生活に秩序と変化を与え、学校生活の充実と発展に資する体験的な活動を行うことを通して、それぞれの学校行事の意義及び活動を行う上で必要となることについて理解し、主体的に考えて実践できるよう指導する。

(1) 儀式的行事

学校生活に有意義な変化や折り目を付け、厳粛で清らかな気分を味わい、新しい生活の展開への動機付けとなるようにすること。

(2) 文化的行事

平素の学習活動の成果を発表し、自己の向上の意欲を一層高めたり、文化や芸術に親しんだりするようにすること。

(3) 健康安全・体育的行事

心身の健全な発達や健康の保持増進、事件や事故、災害等から身を守る安全な行動や規

律ある集団行動の体得、運動に親しむ態度の育成、責任感や連帯感の涵養、体力の向上などに資するようにすること。

(4) 旅行・集団宿泊的行事

平素と異なる生活環境にあつて、見聞を広め、自然や文化などに親しむとともに、よりよい人間関係を築くなどの集団生活の在り方や公衆道徳などについての体験を積むことができるようにすること。

(5) 勤労生産・奉仕的行事

勤労の尊さや創造することの喜びを体得し、就業体験活動などの勤労観・職業観の形成や進路の選択決定などに資する体験が得られるようにするとともに、共に助け合って生きることの喜びを体得し、ボランティア活動などの社会奉仕の精神を養う体験が得られるようにすること。

このうち、体育的行事、旅行・集団宿泊的行事に着目して、筆者が校長を務めた大阪府立普通科高等学校（全日制の課程単独校 1学年7学級）において生徒と交わした会話等を紹介したい。

II 事例

1 健康安全・体育的行事：体育祭で成長する生徒達

(1) 〈体育祭：“熱い季節”の始まり〉

朝7時前、学校に近づくと自転車通学の女子生徒が一人、また一人「おはようございます！」と言って追い越していく。

校長『いよいよ体育祭の応援団の練習が始まったな。』

7時過ぎ学校に着くと、20台以上の自転車が駐輪場に止まっていて、徒歩の生徒も続々と登校してくる。いつもは8時20分から30分の間に登校してくる生徒ばかりである。皆コンビニで買ったのであろうか朝食と飲み物を持っている。

● 9時 定例の教頭先生との朝の打ち合わせの時

校長「生徒が早朝からたくさんきているな。」

教頭「はい。体育祭までに中間試験がありますから結構時間がないんです。」

校長「そうだな。」

(逆算して、今何をしなければならないか。自ら考えて行動できる生徒達を頼もしく思う。)

● 授業が終わると、早速応援団の練習が始まる。

17時過ぎ、校長室を出て職員室に向かうと校舎の外で生徒達が練習している。校舎の外に出て、

校長「おっ！青団か？」

女子生徒A「はい。」

校長「あちらは黄団が練習しているな。」

A「そうです。」

校長「今日は人数が少ないな。」

A「半数は衣装を作っていますから。」

校長「そうかそうか、がんばるな。」

B「校長先生、近くで見るとかわいい。」

校長「こらこら、定年前のおじさんをカラかったらあかんわ。」

A「定年？」

校長「そう。来年3月で。」

A「定年後はどうするの？」

校長「さて・・・」

A「家でゴロゴロ？」

校長「それはないわ。」

B「校長先生、若い！」

校長「おいおい。」

A「初老の人をカラかってはいけません。」

校長「そうだよ。」

- 職員室で教頭先生に連絡した後、職員室を出て校長室に戻ろうとすると、女子生徒が応援団の練習で使ったコードリールを片づけている。

校長「今日はもう終わり？」

女子生徒C「(午後) 5時30分までだもの。」

校長「そうだった。」

女子生徒D「校長権限で6時までにして下さいよ。」

校長「それは・・・」

D「(午後) 7時までの学校がありますよ。」

校長「えっ！」

女子生徒E「学校で遅くまで練習しても面白くないやん。」

校長「それは、そうかも。」

- 17時40分 学校を出ようと駐輪場の横を通ると先ほどの女子生徒Cが走ってきた。

C「歯医者予約を忘れていたっ！」と言って自転車に飛び乗る。

校長「間に合うか？」

C「大丈夫ー！！」

校長「気をつけろよ！」

C「はーい！」

と言いつつ猛スピードで出て行った。

- 18時過ぎ

近くを流れる川の橋を東から西に渡っていると、約30人の生徒が河川敷に集まっているのに気付いた。

校長『赤団だな』と思いつつゆっくり歩きながら様子を見ると、これから練習を始めると

ころだった。声をかけたい衝動を押さえながら橋を渡る。

●30分後

今度は先ほど渡った橋を逆に西から東に渡って様子を見る。練習しようとしているのだがダンスが形になっていない。校外で教員の知らないところで集まる、そのこと自体に酔いしれているようであった。

校長『これからだな。リーダーのもと、まとまっていくのは。』

(2) 体育祭直前・・・

●朝7時、事務室で昨日届いた文書を読んでいると、女子生徒Fが裸足で来た。

F「いつものおじさん（門扉開閉要員）は？」

校長「今、校内を回っているよ。」

F「・・・。」

校長「どうしたの？」

F「特別教室（の扉の鍵）を開けて欲しいんです。」

校長「？体育祭の準備やね。」

F「そうです。」

校長「ちょっと待ってね。鍵をとってくるから。」

F「お願いします。」

しばらくして

校長「この鍵で開くと思う。」

F「はい。」

階段を上りながら

校長「もう他のメンバーきてるの？」

F「まだです。少し早くきて（特別教室を）開けておこうと思って。」

校長「そうか。」

4階に上がり、

校長「この鍵で開くはずや。待ってね。」（カチャ）「よし。開いた。」

F「ありがとうございます。」

特別教室の中を見ると段ボールで造りかけたものが整然と並んでいた。

校長「それじゃ。よろしく。」

事務室に向かって10歩ほど戻ると

F「はくしゅん！」さらに5歩ほど進むとまた

F「はくしゅん！」とくしゃみが聞こえる。（無理をしているんだな）と思いつつ

校長（大声で）「大丈夫かー？」

F（大声で）「はーい！大丈夫です。」

校長室に戻ると私も「はくしゅん！」とくしゃみが出た。

●放課後、いつものように各応援団（赤団、青団、黄団）の練習状況を見て回る。校舎の3

階からそっと生徒達に気づかれぬように見ていると、以前とは全く違う動きをしていた。『指示するリーダーが生まれている！』『仕事の分担ができていく！』『ダンス、上手くなっている！』と生徒達の成長ぶりに驚かされた。

●応援団の練習も最終局面に

18時30分に帰る用意をして玄関を出ると、部活動終了後のグラウンドに応援団の生徒達が広がっている。

生徒達は本番の舞台になるグラウンドでの練習中である。踊りながら小さく手を挙げて私にシグナルを送る生徒もいる。照れくさいのであろう。他の生徒に気づかれぬように私も小さくサインを送る。

校長『おっー！相当練習を積んだなー。もうほぼ完成領域に入っているやないか！！』と感心しながらしばらく練習を見ていて、そっとその場を離れようと校舎を見ると、2階から1人の教員が、3階からも1人の教員が生徒たちを見ていた。2人には小さな笑みが浮かんでいるように思えた。

(3) 体育祭当日

今日は体育祭の日である。朝、早く目が覚めたので家を早く出た。駅から遠回りして学校に向かう。堤防を上流に向かって歩くと校舎が見えてくる。学校まであと10分ほどである。

しばらく歩いていると本校の女子生徒が自転車で私を追い越していく。『あれ？』と思っているうちに、河川敷に集まっている集団が見えてきた。近づくにつれて本校生であることがわかった。体育祭の応援団の生徒達であった。人数を数えると約130人集まっている。

すると、3人の女子生徒が後ろから自転車で駆け付けて来た。「やばい！」「もう練習が終わる！」「どうしよう？」と逡巡している。

校長「早く、降りて行き。『ごめん！』と言って（練習に加わり）。」

3人「・・・」

校長「ほんと！やばくなるぞ！！」

3人は、自転車を放り出し堤防を駆け下って練習に加わった。

私は堤防に腰を下ろし練習の様子を見ていた。腕時計を見ると6時45分だった。7時過ぎ、練習を終えて堤防に上がってきた生徒達と一緒に学校に向かった。

○8時30分 予定通り体育祭が始まった。

(4) 〈進行が少し遅れる〉

本部席に座っていると、事前に作成した進行表どおりに進めようとする放送担当の女子生徒Gと進行の遅れを少しでも取り戻そうとして臨機応変の対応を求める教員とのバトルが始まった。

教員がある指示をすると

G「それは、ここ（進行表）に書いてありません。」

教員「そうね。でも今、こう指示すれば時間を節約できるよ。」

G「でも・・・。」

教員「今は、そのようなことを言うときではないの。」

G「・・・。」

教員「現場ではそのときそのときの判断が大事なの。」

G「・・・。」

教員「もう一度、先ほどと同じ放送入れて。生徒たち突っ立ったままで、(放送で指示したとおり)動いていないでしょ。」

G「はい。」

Gが教員の指示どおりに放送した後

G「でも・・・。」

教員「今は、そのようなことを言うときではないの。現場での判断が大事なの。」

この後、Gは精一杯臨機応変に対応しようとした。

(5) 応援合戦

体育祭の午後の部の最初に、応援合戦があった。3つの学年の各クラスが、青団、赤団、黄団に分かれていてそれぞれ約80名の応援団が7分～8分の応援を繰り広げた。応援と言っても、それぞれの団がリーダーを中心に揃いの衣装でさまざまな踊りを披露するのである。

私は、『あれ？早朝目撃した練習内容と違うやないか。』と気づいた。体育祭の開会式では、「皆さん、おはようございます。応援団の皆さん、今日は早朝から河川敷で練習をしていましたね。最後の最後まで諦めずに取り組む。その姿勢を大事にしてください『もういいや』と思ったら進歩はストップしてしまいます。大学入試も就職試験も同じです。最後の最後まで粘って取り組みましょう。さて、私から3つのお願いがあります。

1つめ、気温が高くなるかもしれませんが水分補給を十分にしてください。

2つめ、一生懸命になりすぎてケガをしないこと。

3つめ 気分が悪くなったら、すぐに先生に連絡すること。

いいですね。水分補給。ケガをしない。気分が悪くなったらすぐに連絡する。それでは皆さんの一人ひとりの力で楽しい体育祭にしましょう。」と挨拶していた。これはしくじったなと思った。

応援合戦が終わった瞬間、抱き合い涙を流し合う生徒達。団長の表情にはやりきった達成感、爽快感が溢れていた。

(6) “先輩はみんなの宝もの”

15時過ぎ 体育祭の全種目が終わり、表彰式が始まる。800人を超える生徒達が、グラウンドに腰を下ろし、集計結果の発表を固唾をのんで待っている。競技の部、応援の部、団デコレーション・団アートの部、総合の部。いずれも赤団の優勝であった。赤団のリーダーたちは泣きながら表彰状と優勝カップを私から受け取った。体育祭が終わって、歓喜する赤団の

生徒たち。

私は校長室に戻り、今日届いた文書を読みながら印を押し、校長用パソコンを起動しインターネットバンキングで支払いを決済して、電子メールを点検する。

グラウンドからは、応援合戦さながらに音楽が流れてくる。校長室からグラウンドを見ると各応援団が踊っている。もう体育祭が終わっているのにである。

私は外に出た。部活動はすでに始まっていて、体育館からは女子バレーボール部や剣道部が練習している声や音が聞こえてくる。硬式野球部はグラウンドの隅っこで申し訳なさそうに練習している。

グラウンドの中央では、青団、赤団、黄団が順に、応援合戦で披露した踊りを踊っていた。そして、記念写真を撮り合い、語り合っている。体育祭担当の教員4名が静かに見守っていた。

再び、校長室に戻り、資料を整理していると、急に静かになった。慌てて窓からグラウンドを見ると青団、赤団、黄団の生徒達がそれぞれ輪を作り座っていた。私はすぐに外に出た。

それぞれの輪では、生徒が一人、また一人立って、話をしていた。一番近い黄団の様子を見る。それは3年生達だった。一人ひとり、今の自分の思いを自分の言葉で語っている。リーダーへの感謝、辛かったときに支えてくれた友人、応援団の練習で知った友人の別の面・・・、泣きながら・・・。近づいて聞きたいが、近づけない。後輩たちがもらい泣きしている。輪が崩れ、後輩たちは次々色紙を取り出し、「○○先輩！ありがとうございます！」と言って寄せ書きを贈っている。あちらでもこちらでも。

そしてそれぞれの輪で1、2年生達が全員手をつないで3年生達を取り囲んだ。3年生達はそれぞれ輪の中央で感極まり座り込んでいる。

そして静かに歌声が広がった。

「いつも優しくて	楽しくしてくれた
先輩がいるから	みんな笑う
悲しいお別れも	最高の出会いも
・・・・・・・・	・・・・・・・・

校長『この歌声は？！・・・。今朝、河川敷で聞いた歌声ではないか！』

あっという間に、三つの輪が一つの輪になった。青団、赤団、黄団の3年生達が一つの輪の中心にいた。

校長『そうだったのか。この時のために1、2年生の応援団のメンバーが、早朝河川敷に集まり練習をしていたのか。』

再び大きな歌声が響く。

「いつも優しくて	楽しくしてくれた
先輩がいるから	みんな笑う

悲しいお別れも	最高の出会いも
この団に入れた奇跡	ただありがとう
心配かけたー	踊れなかったー
迷惑かけたー	でも優しくったー
こぼした涙	これが宝だから
ずっとみんなでいたい	はなれたくない
終わりたくないけど	今伝えたい
どんな時だって	優しくしてくれた
先輩はみんなの宝もの	
いつも優しくて	楽しくしてくれた
先輩がいるから	みんな笑う
悲しいお別れも	最高の出会いも
この団になったことは	ずっと忘れない」

歌が終わり、全員が体育祭担当の4人の教員に大きな声で礼を言った。校長『名残惜しいだろうな。応援団はこれで解散する。もうこのメンバーで同じ時を迎えることはない。“切ない、けれど全力を出し切る”それが世の常。でももう終わりの時刻。こんな経験を積んで人として成長していく・・・。』と考えていたら、応援団全員が玄関横の通路に立つ私の方に振り返った。私は慌てて姿勢を正した。

「校長先生！ありがとうございます！！」

という約250名の生徒の大きな声が夕暮れ迫るグラウンドに響き渡った。

2 旅行・集団宿泊的行事：沖縄修学旅行で成長する生徒達

修学旅行は生徒にとって一生の思い出となる。担任団にとっても一大イベントで、クラスづくりをしながら業者と細かく折衝を重ねて準備を進めていく。

なお、ここからもアルファベットを用いて新たにAから順に生徒を表記するが、前節までの生徒とは別人である。

(1)「伊江島 入村式挨拶」(生徒代表の挨拶の後)

沖縄県の伊江島に着くと、生徒達がお世話になる民家の方々に早速挨拶する。そして校長挨拶。

「伊江島の皆さんこんにちは、校長の森でございます。今日は、本校の生徒たちを受け入れていただきまして心から御礼申し上げます。

大阪と京都の間にあります枚方という町からやって参りました。京都に接し、すぐ東は奈良でございまして、昔は京街道の宿場町として発展した町でございます。

本日お世話になりますのは、これから我が国を支える若者ばかりでございます。沖縄の歴史、文化、生活だけでなく、伊江島のこともお話ししていただきたいと思います。短い時間

ではございますが、何とぞよろしく願いいたします。』

○この後、生徒達は4～6人のグループに分かれて各民家に移動する。

しばらくして、ワンボックスカーに乗り各民家を回ると、生徒たちは貝殻でストラップを作っていたり、紅芋チップスを作っていたり、沖縄の菓子を作っていたり・・・、どこに行っても「こんな明るくて、人なつっこい子どもたちは初めて。」と言われる。

○湧水（ワジー）海岸では、生徒達と絶壁から海岸線を見る。

噴き上げてくる風に

女子生徒「校長先生っ！“まつげ”飛んでない？」

校長「！？大丈夫、大丈夫。」（“つけまつげ”は風で飛ばされていないよ。）

女子生徒「ありがとう、校長先生。」

ある民家に行く

婦人「伊江島の子どもは、中学校を卒業すると『島立ち』するので。」

校長「島立ち？」

婦人「伊江島には高校がないので、本島の高校に進学するため島を離れます。」

校長「そうなんですか。」

婦人「高校生が来ると、子どもが帰ってきたような気持ちになって。」

校長「はい。」

婦人「なぜかワクワクして。」

(2)「伊江島 離村式挨拶」

集合時間になっても、なかなか生徒達も伊江島の人達も集まって来ない。ヤキモキしていると

男性「島時間があるからさ。」

校長「島時間？フェリーの出る時刻まであと35分です。」

男性「大丈夫、大丈夫。」

○フェリーの出航時刻まであと30分。やっと離村式が始まる。

校長「みなさん！楽しかったですか？」

生徒達「楽しかった！」「楽しかった！」

校長「本当にお世話になりましたね。お世話になった皆さんに感謝の気持ちを真に伝えるには、もう一度伊江島にくることです。もうすぐフェリーの出る時刻ですのでこれで話を終わりますが、伊江島のみなさーん！ありがとうございましたー！！」

民家代表挨拶「枚方、寝屋川、門真・・・。懐かしいところばかりです。皆さん、昔、沖縄の人が大阪に初めて行ったら、最初にどこに行ったか知っていますか。それは門真自動車教習所でした。沖縄の運転免許証では本土で運転できなかったんです。

いろいろなことがありました・・・。友人との旅行や新婚旅行でまた伊江島に来てください。」

○フェリーは予定どおり16時に出航。伊江島の人達が港で見送ってくれる。

生徒達は甲板に出て「おじー！」「おばあー！」「おじいがあんな風に踊ってる！」等と言いながら、見えなくなるまで手を振っていた。中には涙ぐむ生徒もいた。

Ⅲ 教職について

教職に就く前、メーカー2社に勤務し“ものづくり”に携わってきた私の経験から言えることは、科学技術の進歩やニーズの高度化によって製品の開発、設計、製造等の技術レベルは向上するものそのことは社内にとどまり広がりが無い。また科学技術の進歩は早く、体得した最新技術も数年後には陳腐化することを覚悟しておかなければならない。

しかしながら教職は違う。生徒の成長に寄り添い、様々な矛盾や理想とかけ離れた現実と直面しながら教員自らも葛藤し成長していく。一方で、日々教育の最前線にいると教育活動の成果は見出しにくいもの久しぶりに会う卒業生の成長ぶりには驚かされる。日々の教育活動は、必ず生徒達の糧となり目前にいる生徒達の将来に活かされることを、教職をめざす方々には理解しておいていただきたい。そのためには、手段が目標化していないか？体育祭・修学旅行などの特別活動は“やりきること”を目標にするのではなく、学習指導要領に示されている目標を常に意識して生徒と接し、生徒と関わってさりげない指導を心がけることが重要であると考えられる。

個々の教育活動を展開する際、常に学習指導要領に示されている目標を確認し、柔軟に教員集団や生徒と接すること。直ぐに成果を見いだそうとあれこれ考え込まないこと。記録し続けて良かったことも失敗したことも次の機会に生かすこと。そして常に省察を忘れないこと。30年間の教員生活からこれらの点を強調したい。